

# 季能古博物館だより



少菜自題四君子屏風 両側は夫の雷首簀

六曲の右から訓読する。(右)先に花ありて衣芳し。玲艶、余香を吐く。群生す山頭の雷、瑤重(玉が重なったさま)月下の霜。六曲(左)=好箇(ほど良く)傲霜(菊をいう)の枝、吐芳して揺ら落る時、屈原(三閭)と陶遠明確碎して雨ながら相い離る。少菜「梅図」自題は、寒梢留まり月落つ。花蕊は凍りて香飛ばず。「蘭図」娟々の月、露は蘭畦に湿す。「竹図」寒色青葱、風雪の中「菊図」牀頭一幅の菊、霜雪何んぞ能く潤む、我にもろみ酒すすむ 杯水の影ゆれ動く。

亀井学を大成した

## 大儒 亀井昭陽伝(九) 庄野 寿人

・昭陽烽火番御免  
・頼山陽九州に入る

・父南冥の  
・広瀬淡窓の誠実

昭陽の烽火番士とその勤め方は、前号まで三回目の上番である御笠郡「天山」まで詳細を記述したので、およそ御諒察いただけるとして、以後の各台上番の内容は省略させていただきます。よって以下は引きつづき各台の上番順に名称を記事する。

文化六年十一月中旬「福岡城東櫓」十二月上旬再び「天山」、同月下旬に現太宰府市北東の「四王寺山」を十二月三十日まで勤め夜おそく百道に帰宅した。

これで元旦の上番を免れ、少菜が父上とお正月ができる喜びをいう。翌文化七年(一八〇)は、五烽火台を指令通り勤めた後、昭陽は烽火台番を免じられる。これは昭陽が番士勤務を皆動した報償である。

城代組が担当した烽火台番の番士要員は七十名であるが、皆勤者は皆無で、自己都合或は病欠勤が続出した。これは十日間の山中拘束による勤務生活が急造の仮小屋で夏暑く

冬寒く、それに給食の粗末、虚弱な体質者は風邪と下痢が慢性になるのである。昭陽には、各地に亀井塾の修了者が多く、「昭陽先生来る」を知ると栄養食品と酒の見まいを提げて来る者が多く、これが昭陽の精神と健康保持になったとされる。

昭陽の精勤は組頭から藩上層に報告され、これに亀井塾に諸藩からの留学生が多いことも知られていた。すべて昭陽のひたむきな勉学と努力によるのである。

家庭における父南冥には益々異常が見られ、夜中の徘徊が甚しく、これを固く禁制すると大声で家人に反抗する始末である。幸い百道松原で周囲に人家がなく騒ぎが外に洩れないのが良かった。末弟の大年が父を治療してみようと姪浜に引き取ってくれる。半年後、百道に帰るが不思議に夜歩きもなく無口で温和に変わっており、ただ食欲が減退し衰弱が見える。大年は詳細を語らないが、以

写真：杉山 謙

能古博物館だより

前に戻ることはないと言う。

この大年が、文化九年五月二十日死去。享年三十六歳で、昭陽の落胆は大きかった。

文化九年九月廿五日、父南冥の七十歳寿宴を太宰府の弟雲来、妹婿の山口白貴、博多の平島生民（南冥の医学高弟で後に代診を勤めた）三苦源吾といった顔ぶれです。父は酒も一口だけで静かに列席者の話にうなづく程度で以前の異常は少しもない。博多の生民が大年先生の治療は大したもの、さすがに医者らしい話をする。

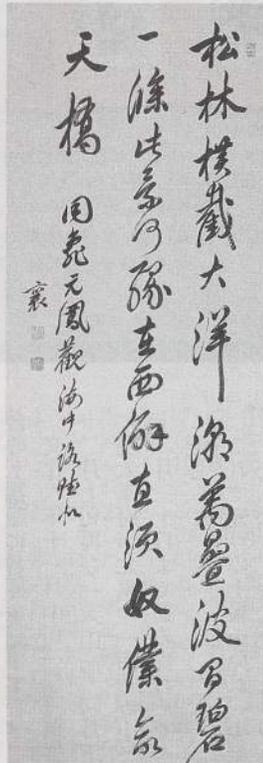
年を越えて、文化十一年三月二日父南冥没。

父の死因は、いろんな噂をされたが昭陽宅で、節句の餅搗きをした。使用人（女中二、下男一）と近所の染婆（ぜんばあと呼ぶ）。染物屋の隠居婆さんと、同家は亀井家よりも古い百道の先住者でもある。本人が世話好きで亀井家とくに昭陽の妻の良き話相手が無類の協力者である。これに書生たちも手伝い、毎回盛んな季節行事である。

燃え木の「おき」（まきがもえきって炭火のようになったもの）が大量に出るので、父に付けた小女が南冥居室の堀ごたつに干能を使って、か

なりの量を移し、自分は餅搗き現場の方が面白いので、父の離れ家の方はすっかり忘れていた。

まもなく父の隠宅から煙が出ていると知らされ、昭陽夫妻が走って見ると出火している。すぐ煙をおかして父の居間へ入ったが人影もない。そこへ人が来て、老先生はさっき外へ出られました、という。



頼山陽、文政元年（一八〇）四月二十日博多に着く。松永子登宅に滞在するこの間、まず亀井昭陽を訪ね、昭陽は荒津山（現西公園）に案内。玄海展望し、元寇ノ役と海の中道に神代史など語る。

山陽この状景を詩書とし昭陽に贈ったのが左の掛幅である。

これで昭陽は安心して書生たちに父を探させるとともに自分は消火につとめ、牆壁が焼けて倒れているのを引き起こすと墻下にうつぶせになっている父を発見。身体には別段異常はなかったが既に息は絶えていた。

以上は、亀井思いの広瀬淡窓が弔問にきたとき、昭陽は妻、長女の友（十七歳・少琴）、次女の敬（十五歳）

長男義一郎（十歳・後に蓬洲を号す）。次男鉄次郎（七歳・陽洲）、末女の世（四歳）を整然と列座させて淡窓の悔みを受けた。次で昭陽は父南冥の死去状況を語った。これを亀井父子の愛弟子であり、終始父子に盡くした義理固い淡窓が記録しているのを引用したのである。

この淡窓記録で「身体に異常なかつた」、という状況は煙にまかれた、いわゆる窒息死と推定される。自ら火を放って死んだ状況では身体に異常がないのが不自然である。

牆壁が土壁であったか、板で作られたものであるか、わからないが年齢と多少は身体不自由があり、転倒と窒息が重なったとされる状況である。現在では、この淡窓の記録によ

るのが最も正しい判断とされている。藩の探索方による昭陽の説明とその状況調査および父子の確執など周辺聞き込みなどもされ、昭陽にお構いなし、とされている。

南冥の死に前後して、その二年前に三男の大年（号は天地房）、二年後に弟の曇栄（前崇福寺住職）が相次いで逝去した。これで世上に評された五亀も中心にされる南冥と共に三亀が欠け、いまや昭陽と次弟大莊（雲来・太宰府）の二亀になったのである。

文政元年（一八〇）四月、かねて予報されていた頼山陽が昭陽に会うべく九州に渡ってきた。

昭陽と山陽は、まず父親同士が京坂修行中に意識し合ったことに因縁が生じている。両父親とも学問修行の後、郷国の藩に登用されることまで共通する。即ち頼春水は広島藩、南冥は福岡藩に取立てられ、山陽と昭陽はお互いその長子という事情まで共通するが、両者に面識はなかった。

昭陽が秋月侯の参勤に従行して江戸に登ったことは、学者間の情報になり、これで山陽はとくに昭陽を意識したようである。

山陽が友人の池口子継宛の手紙に

「亀井元鳳東遊候由、秋月侯に付き参り候て、都下にて服部塾・荻生塾の社中周旋候うち、家叔父（頼杏坪をいう）も一再面会、…中略…容貌を甚だ魁梧（落着いて大きく見えること）之由、此四月頃は帰国、山陽道諸家へも緩々問尋ね候う積に承り候故、待居り申候」と書いています。案外に江戸時代の情報、とくに学者間の伝達は迅速であったことがわかる。

山陽の推察通り、昭陽は江戸からの帰途、山陽を訪問しているが、秋月侯の行列を離れてのことで充分な時間がなく昭陽からすれば父以来の初めての頼家表敬であり、山陽とも顔合わせ程度になったと思われる。この時、山陽廿八歳、昭陽三十五歳であった。

山陽の九州入りは文政元年四月廿六日箱崎に到着する。昭陽が江戸帰りの広島の頼家を訪ねて十一年目の山陽対面である。

かねて山陽と博多の松永子登との連絡もあり、箱崎に出迎えた後、直ちに博多土居町の松永宗助（子登、又は花遁を号する）邸に入る。

松永宗助は奥村玉蘭ら博多町人の文人グループで亀井入門も古参株である。よって山陽来訪は一同が歓待

を期していたのである。昭陽は、松永らとは別に考えることがあり、日時を別に行動するつもりでいる。

山陽到着三日後、昭陽は山陽をまづ、荒津山（いまの西公園）に案内し、海陸の展望をさせながら、遣唐使以来の大陸交通、また元寇、その後の倭寇出没と有力社寺による勘合符貿易、或は私貿易などを語った。

その上で、百道のわが家に伴って、少柴の席画を披露させ、これに山陽は詩賛した。もとより酒になって兩人は大いに語り合った。

元来、両者の史観は異なり、根底の学問にも大きな相違がある。とくに昭陽の古文辞、これに山陽の平俗文体の違いは、元々比較にならぬのであるが、いまや『日本外史』の一般受けが見え始め、いささか得意になりかけた山陽は、とても出来もしない昭陽の古文辞体による古代史『蒙史』を、読みもできないのに無用の雑物視して話題にしないことで逃げを打つ調子である。よってどちらでも語り合うこともなし、と認め合っ

ての交際である。当世、文芸流行に乗った詩人仲間も山陽の平俗詩は、いとも感嘆にできが、徂徠学派の詩には大いに手

間取る。難を避け易に付くは安く、山陽中心の詩会は酒も飲み易く大いに賑々しい。

山陽滞在中、昭陽も招待されるまに大いに遠来の山陽もてなしに協力したのである。

山陽も博多の魚菜のよさと芸妓の明るさが気に入り長滞在をするつもりでいたようであるが、福岡藩の退去勧告でついに腰をあげて九州を下すべく、五月十七日出発した。

こうした藩の態度は山陽が元々脱藩者であること。これに修猷館の朱子学者たちによる山陽異端視があり、これに博多町人等の迎合が過ぎると当局を動かした内容がある。このため山陽が滞在していた豪商の松永子登もついに山陽をかばいきれず昭陽と共に太宰府に向かい山陽を旅館に宿泊させ、別離の宴を張った。

この時の山陽の席画揮毫は亀陽文庫に収蔵している。

これに昭陽が山陽を案内、荒津山から博多湾を形勢する「海の中道」を詩にし、これを山陽は記念揮毫として昭陽に贈った掛幅を併せ二点を写真紹介し、その説明をする。

次に、昭陽の頼山陽観を率直に語った資料があるので参考に供する。これは、豊後日出藩の帆足万理塾

に学んで英才を知られた同藩士、勝田季鳳が、師の万理に勧められて亀井塾に半年間留学、昭陽に就いた。

その内、両者すっかり打ち解けてからの話である。こうして偶然に、勝田季鳳が昭陽の山陽観を忌憚なく聞いたのである。時に文政二年山陽が九州を去った翌年になる。

以下、原漢文の訓読にとどめる。「勝田子、頼子成を龜子（昭陽のこと）に叩く。曰く人物如何。龜子曰く何も無き也。何を以て之を言うか、龜子曰く臂を把りて談ずること三日、其の言は太子公（歴史的に聖徳太子までの意）に上らず。これに我が烽火記を示す則ち喜び、仁徳紀は則ち否とす。我、是を以て云う耳矣。文章は如何、龜子曰く、才機尖々として虎を千原に放つが如し、苟しくも快意の一なり。何を恠々、期して遠きを為す乎。噫、其の刻苦を自らして向かうところ殆前に無き矣。之を求めて我が邦の古人中に誰を比すか、龜子曰く、余以て知る所は、其れ金華平子和（註1）たる乎。唯子和は物外に磊落、心は水月の若し。仮りに昭代にして遣唐之役有らば子成なるもの無きとするのみ」。

帆足万里は、昭陽に信頼を持ち、

この後も引きつづき同塾修了生の派遣をつづけた。福岡までの道筋が日田通過となることもあり、期せずして咸宜園に寄り、淡窓に表敬訪問をする。淡窓は、本人たちに休養として数日間の滞在をさせ、自分の亀井塾修業を物語るなど、また訪問者の対話も得たが、これらは淡窓の咸宜園経営の一方法でもあった。

前記の勝田季鳳を日田広瀬淡窓の紹介例を次に述べると、原文は淡窓の幼年から六十四歳までの日記『懐旧樓筆記』である。同書巻十八に記述がある。淡窓文は片仮名使用い。

文政二年二月一日日出ノ勝田深造・松本鶴眠来り見エタリ。帆足鵬卿ノ門人ナリ。帆足ヨリ命シテ。亀井ノ門ニ入ラシメントス。予カ書簡ヲ乞ウテ、紹介トス。(以下略) 右の「予カ書簡ヲ乞ウテ、紹介トス」は、淡窓の間違いである。昭陽と日出藩の帆足万里は、既に兩人信頼厚く、万里は事前に昭陽と書信を交わし充分に諒解を得ての両生派遣である。別は淡窓の紹介を必要としないのである。ここは淡窓の記事が走ったとしておこう。

なお、帆足塾からは以後も同塾修了生の亀井留学がつづいた。昭陽の『空石日記』、淡窓の前記

日記ともに、日々記帳するのでなく備忘メモに人名その他を記録し、数日後に余裕を得て、日記文として記録を続けるのである。とくに淡窓日記は記事的にも勝れており、以上の方法によつたとされる。

遊へり。今、益多は我門ノ第一流ナリ。是レヲ師家ニ進メズンバ有ルベカラズ。故ニ之ヲ勸メテ、西遊セシメタリ」としている。

著書も多く『文莊先生遺集』十卷、『金華稿冊』六卷は代表作とされる。享保十七年、四十五歳没。(註) 2 廣瀬旭莊



頼山陽の博多滞在は藩内に批判を招き五月十七日出発。大宰府に宿る。子登これを送り別離の宴を為す。山陽得意の水墨画を描き、これに「博多を発す。子登送り至る数里、途上此れを写し一笑と為す」と自賛を添えて、子登に贈った。

「初メ予カ教授ノ事ヲ始メシコト自ら人の師ト足レリトスルニ非ズ。

に学ばせた。

童幼無知の輩を導キテ、少シク文

義ニ通セシメ・小成ノ後ハ筑ニ至

リテ、先生ノ門ニ入ラシムルコト。

コレ素身願ナリ。師家(昭陽のこ

と)ニモ兼テヨリソノ旨ヲ通達セ

リ。コレニヨリテ、諫山安民。小

関亭。麻生伊織か輩、皆曾テ筑ニ

(註) 1 金華平子和

萩生徂徠門下で詩文の才能は抜

群と評された平野金華、字は子

和で金華は号。徂徠が「狂生」と呼

ぶほど酒飲み、滑稽で人がよく義

気もあり、自分は不自由しながら

人の世話をした。豊かな感性と詩

情に恵まれ徂徠に愛された。

明(遊廊に逗留)で心配させる。昭陽が資金を絶つよう親元に連絡しても本人が日田の富豪「博多屋」の顔で、後払いで遊べるので効果がなかった。秀才で学、詩ともに進歩が早く昭陽を感じさせた。天保三年(一八三二)から大

村藩主に招かれ江戸上屋敷儒者となる。文久元年日田に帰る。義弟

青村に塾を託し、摂津池田に開塾

同三年八月同地に死す。享年五十

七歳。特に詩学に長じ詩人として

評価が高い。

亀陽文庫に旭莊作「自題書法帖」

長巻および詩書掛軸等の秀逸作がある。

## 福岡藩主は將軍吉宗孫

筑前福岡藩主六代の黒田継高、宝曆十三年（一七六三）十一月十三日參勤到著を幕府に届出る。これにすぐ老中連署の奉書を以て来る廿三日巳上刻（午前十時）登城を告げらる。

平素は遠国大名の參勤出府には十五日程度の休養を経て幕閣に出頭する慣例で、これに日時指定の召出しは重要事を察せられる。

当日は、白書院に老中列座。かねて申出での貴藩御養子について、上様お許しあって一橋刑部卿の御二男準之助君に仰付けある旨、申渡さる。但し、このこと押して申される様にお受けなさぬよう、と御念のお含みあり、このことお心得あれと言葉を添えられた。

これに継高は、忝けなきことなり、と答えて退出。直ちに桜田の上屋敷に帰る。

直ちに、江戸家老、留守役など重役協議に入るが、一同、呆然と思案するばかりで発言もない。

22号 準之助君の血脈は、前々將軍吉宗の孫、父は吉宗四男で一橋家を創立した初代当主宗尹の二男、当年十二歳である。

やがて継高夫人が「血統を伝えるは御家孝道の第一なるも、すでに今日のこと御家大事として換えがたし。

なわ將軍家御威光を以て、押して申入れたることなき様心得よと、御念のありたること忝けなし。この上は有難く御承引こそ一定なり」と。

夫人の言葉は、子々孫々の相続こそ第一義であるが、すでに血統の相続なき実状に、当方内請が上様お耳に達し御配慮いただきながら、押してのことにするまじく、と御心づかいこそ、この上なく忝けなし。この上は、御受けするほかなし、とする意見である。

これで、継高六十一歳は「黒田家の血統絶ゆるも詮方なし」と決断。

幕閣は、直ちに台命（將軍命令をいう）により一橋徳川家に、二男準之助を筑前国主黒田家養子仰付けられる。

翌明和元年（一七六四）準之助は、黒田家の桜田上屋敷（大名夫人と家族の定住となる）に移る。

同三年、十五歳で元服、將軍家治に治之の名乗りと従四位式部大輔の位官を受ける。

同六年、十八歳で養父継高隠居により筑前守を受け藩主となる。

翌七年、十九歳で領国筑前福岡に

初入国する。これに將軍家治から自

らの乗馬を鞍置き共に拝領する。治之は馬好きで十二歳で馬術免許を受ける。四月十五日福岡着。翌十七日荒戸山東照宮（現西公園）に参る。

五月廿五日、城内追廻馬場に拝領馬を引かせ、乗馬して養父継高に己れの馭法を見せる。

五月廿八日より六月七日まで家中諸士の礼を請ける。

六月二日、黒田藩の重要加役である長崎警備巡視に出る。七日着、即日両番所を巡視後、幕府任命の長崎奉行新見加賀守に対面。同夜加賀守治之宿所に来り献酬あり。九日長崎発、歸路十三日太宰府天満宮に参り、延寿王院父子の拝謁を許し、社僧み

なも同じく許し、同日帰城。八月六日から十六日、長崎再巡視。十月十九日、父君宗尹七回忌に付江戸上屋敷家老加藤半左衛門に代香を命じ給う。

襲封の祝、諸士に料理を賜う。十一月朔日より十一日間に及ぶ。一家老以下直礼身分以上の士、総員一、七四五名。（江戸、京都、大坂の各詰の諸士二八四名を除く）

治之は領内巡視にも時季を見て出る。初めは、田畠に耕作する農夫の姿を見かけず、不審に思つて従行の

郡方（郡部を担当する者）役人に質問すると、郡奉行からの命令で、半

裸の者、或は粗末な作業衣をつけており、失礼と考えて「殿様御巡回中は農作業に出ること禁止」した、と。

治之は驚いて、これは以前からの定めであるかと聞くと、自分の役目中は未だ藩主侯の巡視がないのでわからぬという。驚いた治之は、すぐ巡視を止めて帰城。郡奉行を呼び聞くと御家老の御意見であるという。すぐ家老首座吉田弾番（知行八千石）を呼ぶと、御城代（城代家老黒田美作のこと）と協議して決めた、と答える。折良く其の日は城代家老登城ありと聞く。直ちに召見し、藩主巡視が百姓の農事を止めるなど一切せず、平常の通りであるべし、と命じ

その上で、次の巡視には、「美作も余の供に付け」と申し渡した。

これは前例もない、と同席中の家老が驚き顔で言うのに、美作の次は全家老交替で順次に「余の領内巡視に同行せよ」と命じた。できれば年一回必ず領内巡視を行う、そのため百姓の農作業は平常通り励行させることも徹底することになった。

治之は、やはり継高老公の藩主在位五十一年は長過ぎたのか、と思つたが、もとより口にすることはない。

# 今宿亀井塾と加勢儀屋

由比章祐

## ○今宿亀井塾

文化十三(一八六〇)年、祖父南冥の門人の三苦源吾を養子に迎えた亀井少掣は、文政七(一八二四)年、志摩郡今宿(現在西区今宿)の唐津街道沿いに転居した。

源吾は雷首山人と号して、医業のかたわら今宿亀井塾を開いたが、少掣は画業の傍ら、夫の家塾を手伝ったことはよく知られている。

少掣は、娘紅染を幼くしてなくしたので、弟陽州の次男(後の雋永)を生後一年余りで養子として引き取った。天保六(一八三三)年のことである。

## ○周船寺加勢儀屋

今宿から西へ三キロの唐津街道沿いの周船寺(西区)は、福岡領怡土郡から唐津街道への出口集落である。また、北の志摩郡元岡(西区)から街道へ出る交通の要地の集落で、半ば宿場的で商家も多かった。

この周船寺の東の入口に酒造と質屋で財をなした「加勢儀屋」富永家があった。富永家は、福岡の豪商

## 「加勢屋」なども親族であった。

富永家は、亀井雷首の実家の怡土郡井原(前原市)の三苦家とは、近い親族であった。富永家の当主になった長男只七も次男延蔵も、ともに今宿亀井塾で雷首に学んでいる。

この次男延蔵は、病弱な兄を助けて、家業の酒造や質屋を手伝ったが、自作の一町歩余の田畑の耕作を主として担当していた。

延蔵は記録することが好きで、毎晩家業のことから、酒場客の噂話など、毎日克明に日記を書いていた。

この日記は、現在嘉永三年、同六年、七年、安政三年、同年分と慶応二年三年合冊分が残っている。学者や役人の日記とは異なって、若い農村青年が、見たり聞いたりしたことを書いているので、読み本を読んでいるように楽しい。

この七ヶ年分を日記にあらわれている富永家との交流を以下尋ねてみることにする。

## ○亀井家と加勢儀屋の交流

嘉永三(一八三〇)年三月二十六日、

雷首が加勢儀屋を訪れて、隠居の父と将棋を楽しんでいたが、患者が往診を乞うているとの通知で、昼頃急いで帰った。

七月十五日、還暦を過ぎた雷首は往診が徒歩では疲れるのであろう。乗馬で加勢儀屋を訪問している。

十二月二十八日、亀井家には、盆から年末までの薬代として、藩札二貫文を支払っている。周船寺近郊の他の四名の医師は、四、五百文であるので、雷首は加勢儀屋の主治医であったといえる。

雷首は、嘉永五(一八三二)年八月、六十四歳で病没したが、この年の日記がないので、加勢儀屋との交流はわからない。

同六年、亀井塾の旧門人一同で、亡師の石塔を一週忌に建立することになり、門人代表で加勢儀屋の当主富永只七が世話していたらしい。

石塔は、徳永山(西区徳永)の花崗岩を切り出して作る手筈になっていた。

ところが、少掣は亡父の石塔のことが気掛りだったのであろう。徳永山の石切り出し場を訪れて、石屋に文句をつけた。

怒った石屋は、石塔の製作を断ると亀井家に知らせて来たので大変に

なった。驚いた門人が急いで代表富永只七に知らせに来た。これは困ったことになったと只七が、徳永の石屋へ行こうとすると、旧門人女原の医師牧野季山がちょうど訪れて、

「しばらく待ってくれ、私も往診の途中だから、診察を済まして同道したい」というので、季山医の帰のを待って、門人六、七人を集めて、一緒に徳永の石屋をなだめに行き、少掣女にも訳を話して了解させたらしい。

七月十二日、加勢儀屋から恩師の初盆に高価な白張り提灯と素麺五わを供えている。初盆詣りは、記述されていないが、旧門人など多数参詣したことであろう。

八月二十三日、雷首の一週忌の案内を受けて、隠居の重七が参拝している。

嘉永七(一八三四)年、一月十二日、富永只七は、今宿の伝七、亀井雋永と同行して、池田(前原市池田)の結婚式に客に連れている。池田はどんな続き柄か不明。

二月十九日、今宿の伝七が、亀井雋永の縁談について、加勢儀屋へ依頼に来ている。

三月三日、今度は少掣と伝七が同道して加勢儀屋を昼頃訪れて、夕刻

まで、隠居重七と縁談のことについて協議した。

四月十八日には、少掾が来るし、二十八日には、本人の雋永も富永家を訪れている。

雋永の結婚式の記事はないが、この後に行われたのであろう。

この年の八月二十三日、雷首三回忌には、当主只七が案内を受けて参拝した。

九月十八日、亀井雋永の新婚の嫁を神事客に招待して、富永家親族に披露している。

九月二十四日、雋永を案内して次男延蔵が志摩郡久家（志摩町久家）の神社祭礼の宮角力見物に出かけた。

安政三（一八五〇）正月三日加勢儀屋の借家が火事で全焼したので、早速雋永が火事見舞に来訪している。

二月八日、亀井雋永の妻が出産、十一日の祝いに招かれて、富永家の母が出かけている。

二月十四日、富永家の分家が借財がかさんで財産整理するようになったが、この整理の仕方や金の借入れの相談であろうか。兄只七が亀井家を訪れている。

七月盆前の医師の葉代の支払に亀井雋永へ六〇〇文払っているし、年

末には、同じく金一朱を支払っている。雷首の時のように主治医的な支払でなくて金額は少ない。雋永も、医師の修業をして医者を開業していたのであろう。



今宿・亀井家二代目 亀井雋永の書

頭を命ぜられた。庄屋富永五右エ門は、経理にくらゐるので、村費支出にまちがいが多かった。村の集会で、みんなから抗議が出て、とうとう庄屋は辞職届を出した。

ところが、この村費の支出の間違ひは、加勢儀屋只七、延蔵兄弟の仕業であると訴え出られて、兄弟は「村預り謹慎」が命ぜられた。身に覚えのない濡れ衣であるが、外出禁止の身では、釈明のしようもないし、家業の商売にも支障が多い。

十一月十七日、雋永が招かれて兄弟の赦免になるよう、運動の仕方について協議がされた。

母の実家福岡豪商加勢屋を通じて郡奉行所や郡代へ運動がされたようである。

親しい有力庄屋徳永村庄屋西村権右エ門や今宿富商油屋（これは雋永の仲介であろう）からも郡代へ赦免

が願ひ出されて、二週間で赦免の命が出て、加勢儀屋は大安堵。

早速十二月五日、当時は高価な白砂糖を持参して、今宿亀井家と油屋など、赦免運動に協力した人々にお礼廻りしている。

安政四（一八五二）七月六日少掾は病没したが、この四年と五年の日記は散失しているので、この間のことは不明である。

安政六年一月二十九日、加勢儀屋分家に数人の博多客人が訪れたが、雋永も同道して来て、分家で大宴会となった。

四月六日は、少掾の三回忌で案内を受けて母が参拝した。

このように、雋永の代になっても親族としての交流がつづいている。

この頃、糸島東部では囲碁が流行して、各家やお寺を廻りて囲碁会が催されているが、雋永もこの同好会に時折来参している。

この日記の筆者富永延蔵家には、少掾の画く屏風一双を蔵している。

小さい色紙半分の大きさで、花鳥風月、美人画と多彩である。どうして延蔵家に伝えられたかわからないが、雋永の嫁取りのお礼に少掾が贈ったものであろうか。

## 「老子」を聴く (三) 安 陪 光 正

## 木の実降る

能古渡船の甲板に立つと、左手油山の奥に背振山、それから右へ狛師岩山・金山・城山、少し低まって三瀬峠、さらに井原山から雷山へと連なっていた。そこで切れた稜線は、

また羽金山で立ちあがり、浮嶽・十防山へとかすんでいる。どの山も昔登ったなつかしい山、春の尾根はミツバツツジやシャクナゲが見事だったし、カンアオイやオキナグサを心あてに歩いた。秋は雑木林の紅葉、色とりどりの美しい木の実が尾根の山路をたのしませてくれた。海岸には左手にドームの丸い屋根が銀色に光り、三十五階と言う高いシーホーク・ホテルが建設中である。それから右手へ、福岡タワーの尖塔、建設中のビルが林立する。昔、埋立て前の海岸は年古りた松原だった。今にその老松が、ひよろひよろと伸びて少し残っている。

昔の姪浜港は、今よりずっと奥の名柄川の河口にあって、沢山の漁船が舳先を連れ、小さな棧橋から能古

通いの渡船が出ていた。約四十年前

能古に「磯香」と言う旅館があって、時に出かけたものである。長男の誕生祝いを、私達の仲人や両親を招いてしたこともある。その頃能古からの帰りに港で知り合った漁師がいた。彼は潮の引いた小舟の上で黒い胸ガツパにゴム長をはいて、揚げてきた蛸壺からしきりに蛸を取り出していた。蛸は舟板の上に足を伸ばし、隅の方へ逃げようとしていた。そんな彼に声をかけて以来よく話すようになり、来いと言われるまま、港近くの彼の家へ時々遊びに行った。彼の名は徳兵衛さん、妻君を早く亡くして、四人の子供を男手一つで育てていた。徳兵衛さんは漁師のかたわら海苔も作っていて、春になると自分が作ったという海苔を持ってわが家にも来た。そんな折り娘が嫁に行つて苦労しているとか二人の息子が後をついで漁師になつて安心したとか、よく子供たちの話をしていた。長い付き合いだった徳兵衛さんも、晩年は漁師をやめて老人会会長などをしてい

たが、昭和六十年九十歳でなくなつた。彼が死んでからは、姪浜に行くこともなくなつた。

間もなく船は能古を目の前にした。島は全山雑木山、中腹には竹林が広がって、白く光る小学校や博物館の下は桜の薄紅葉である。今日はコスモス見物の人達で船は満員、臨時使でピストン往復である。バス停前には親子連れや老人たちの行列が長く続く。私達はその後を廻つて博物館への近道を登る。石段には黒褐色の藪椿の実がちらばつて、仰げばまだ青い実をつけたものもある。

## 論語と老子

「老子」の講義も六回になり、今回は本文解釈の外に論語と老子の比較が講ぜられた。論語は理想を追求し、いにしえの聖賢を規範とし、目的指向性である。かくあるべしとの理想をかかげて人々へ精進を求め、すなわち「ネバナライ」と人々に努力を求め、有為・人為的であり、その為には剛直、強靱な精神が要求される。君に忠でなければならぬ。親に孝でなければならぬ。夫婦相和しなければならぬ。朋友には信がなければならぬ。人には礼を以て接しなければならぬなど、我々年代の者は、このような「ネバナラ

ナイ」といった儒教的教育を受けて育つた。内なる心に従うというより、外なる規制に律せられた。この教育は、偽政者にとって都合的な学問であり、我が国においても国教として長く重んぜられてきた。

これに対して老子は、無為自然の道にのつた現実的・自由に生きる人生を説いた。孔子の「ネバナライ」に対して「デアル」と対比された。君に忠である。親に孝であるといったように、有意・人為的ではなく、他から律せられず、内なる心に従うものであった。物にとらわれない「自富自貧」、「柳緑花紅」といった禅的境地を想いうかべる。

老子の読み方には色々ある。如何様にも読むことができる。経世済民の書として、あるいは身体養生の書として読むこともできると先生は例をあげて説明された。論語はむしろ体制的、老子は反体制的とも言えそうである。人々の幸せを求めてかかれたこれらの書は、山頂をさわめるに道は一つではないことを教えているようである。

## 楚楽を聞く

今年には花菜千里の湖北省で荊州博物館を尋ね、曾侯乙墓(紀元前四三三)から出土した青銅編鐘や石編磬

を見ることができた。それらは架に釣って打ち鳴らす打楽器、春秋戦国



荊州博物館にて楚楽を聞く。楽人の左後は編磬、右後は虎座鳥架鼓、その下に小さな編鐘が見える

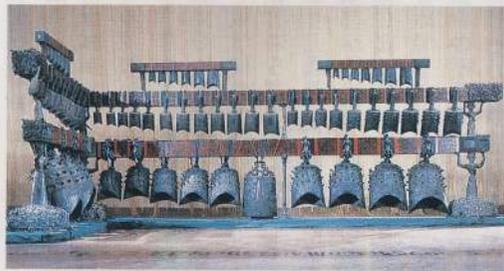
時代楚の祭礼・宴会・戦争・狩猟などで演奏され、それにあわせて歌われかつ舞われたという。編鐘は鐘を半分にしたようなもの、大きいのは小さい梵鐘ほどもあり、小さいのは手に持って叩ける鐘ぐらい。六十四個の編鐘は、小さいものを上段に、中ぐらいのものを中段に、大きいものを下段に架け並べる。各段の編鐘は小から大へ音律順に釣り、小さいものは木槌で叩き、大きいものは撞き棒でつく。石編磬は石を磨いて作

り、「へ」の字形の板石に孔をあけ、小形から大形へ音階順に二段に釣り

並べる。これも木琴のように叩いて奏する。二四〇〇年前の楚の国の楽器が、架と共に無傷で出土したことは誠に驚くべきことである。

博物館の別棟で、これらを模

した楽器で奏する楚楽を聞いた。舞台の左側に



曾侯乙墓（戦国早期、BC433）より出土した青銅編鐘とその架（湖北省博物館編、絵はがきから）

足付きの琴が三組、右側の長い座卓には笙や笛をならべる。琴の後に二段になった石編磬が二組、笙か笛の後に二段の編鐘がずらりと並んでいた。一番奥に虎座鳥架鼓、中央に一番大きいものが置かれ、両側へ次第に小さくなる架鼓が左右対照にならんでいた。聴き手は私たち六名だけ、最前列の椅子に掛けて待っていた。や

がて十人余の官女姿の美女が現れ、それぞれの定め座についた。編鐘や編磬前の美女たちは、踊るように衣をひるがえし、磬を叩き鐘を撞いた。大きい鐘はと見ていると、太い撞き棒を両手に持ち、斜下方へドンと撞き下すのである。笙や横笛を吹き太鼓を打って合奏すると、私はふとふるさとの村祭りの楽の音を想い浮かべた。楚辞（目加田誠訳）九歌の中に

九歌の中に

枹をあげて太鼓をうち  
拍子をゆるめてしずかに歌い  
管絃つらねて盛んに唱う  
巫は美しい衣着て舞い  
香は高く堂に満ちて  
楽の音賑やかに入りみだれ  
神はよろこび楽しみたもう

などと、当時の楚楽や楚舞を詩うものである。それは丁度老子のころ、彼もまたこんな楚楽を見聞したのであろう。

昔を身近かに

春秋時代は紀元前八世紀から四世紀頃まで、その後秦の全国統一（紀元前二二一年）までを戦国時代という。孔子と老子とは共に春秋末から戦国初にかけて生きた人、春秋五覇、

戦国七雄が中原に鎬を削った時代である。個人の意思や感情を屈殺してしまう戦乱の中に生きた民衆、彼らを救うために、孔子や老子の人生哲学が生まれたのである。

江陵の荊州博物館では、二重になった漆塗りの木棺、さらにそれを納める巨大な木槨を見た。地下深く埋められていたその中には、遺体が横たわり、副葬品の数々が見出された。二四〇〇年前の遺体は、栄養もよく、皮膚は柔らかく、圧せば弾力性がありそうにさえ見え、とてもそんなに古い死体には見えなかった。木彫漆彩の木桶・円漆盒・三魚耳杯・扁壺などの見事な彩色と文様は、今作られたと言っているように色鮮やかである。また同時代の絹織物が数多く残っているのも驚きであった。それらはいずれも楚の都紀南城一帯から出土したものである。

これら楚時代のものを眼前にする、二四〇〇年前の昔が手のとどきそうな時にさえ思える。荊州から程遠からぬ長沙の馬王堆三号墓で、帛書『老子』が発見されたのは一九七三年のことである。あれを思い、これを思い、老子の講義を聴いていると、老子が少しは身近かな人に想われてくる。

# ドイツの壁で

会員 墨 羊子

能古の博物館から、昨年暮れにカレンダーが参りました。九州各地田舎家風のスケッチで、大へん懐かし心温まるものでした。

実は、私の甥で二十数年、ドイツで生活している〇君へ送って、喜んでもらった話です。

その〇君は、出生の時の障害(鉗子分娩)で、重度の脳性小児麻痺となり、小・中学校は、養護学校で育ち、高校は、東京都立駒場高校、大学は、早稲田大学哲学科と進みました。榎山教授(女優の榎山文枝さんの父君)のお薦めにより、卒業後は、本場のドイツへ留学することになり、はじめて、一人で海を渡り、以来二十数年、哲学を研究し、昨年、哲学博士の称号を与えられました。昨年は、国際障害者年と言うこともあり、母校からの依頼(航空券、宿泊等一切母校持ち)で、『障害者と哲学』

という講演の為に帰国いたしました。

その後、祖父母の墓参りの為に福岡へ参りまして、ドイツのこと等話しておりましたが、「僕も結婚したい」と言い出しました。私たち叔母は、自分の子供の結婚話ばかりして〇君のことを気遣うことを忘れていたことを恥じ、必死に、積極的にお嫁さん探しを致しました。あと二日で日本を離れると言う日に、そのお嫁さんが見つかりました。〇君のお母さんからの、お嫁さんの条件は、地震、火事、津波等の時に〇君を背負って逃げてくれる女性でした。その女性は、中学校の英語の先生で、車の運転も出来る方でした。四十三歳で〇君より三歳若く、電動車椅子の夫、東京都からの月、九万円の障害者年金を、はにかみながら、しっかり受けとめてくれました。

ドイツからの電話では、石の家の壁には、私が送った能古のカレンダーが掛かり、明るい笑い声が続いているそうです。おわり

一九九四・六・二九

## 菜穀火吟行句会

能古島(おくんち・博物館)

十月九日

・佩刀の稚児の正装浦祭

ひふみ

### 亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子⑤・西嶋洋子⑤
- 岡部六弥太⑤・村上靖朝⑤・星野万里子⑤
- 小田一郎⑤・吉村雪江⑤・速水忠兵衛⑤
- 桑形シズエ⑤・上田紀子⑤・安村勇一⑤
- 高田浩二⑤・桑野次男⑤・西村忠行⑤
- 木戸龍一⑤・西島道子⑤・玉置貞正⑤
- 石橋七郎⑤・藤木充子⑤・和田宏子⑤
- 西川真澄⑤・末松仙太郎⑤・板木継生⑤
- 行成静子⑤・鬼塚義弘⑤・吉原水⑤
- 中畑孝信⑤・片岡洋一②④・石川文之④
- 坂田泰滋④・橋本敏夫④・三宅碧子④
- 山内重太郎④・星野金子④・若重二郎④
- 横山智一④・宮崎集④・岡本金蔵④
- 青柳繁樹④・都筑久馬④・若下須美子④
- 斎藤悦子④・西政憲④・林十九楼④
- 桃崎悦子④・安永友儀④・磯崎啓子④
- 大神敏子④・三角健市③・織田喜代治④
- 土屋正直④・鶴田スミ子③・伊藤康彦③
- 石橋清助③・塚本美和子③・寺岡秀實③
- 柳山美多恵③・奥田稔③・原田種美③
- 岸洋子③・西尾健治②・長八重子②
- 黒川松陽②・日野和子②・隈丸清次②
- 長尾茂穂②・井上敏枝②・平河涉②
- 葉山政志②・久芳正隆②・藤島正稔②
- 吉富とき代②・大山宇一②・川島貞雄②
- 半田耕典②・久野敦子②・野田はつ②
- 武山雅敏②・浜野信一郎②・墨羊子②
- 古賀清子②・前田静子②・森本憲治②
- 野口隆②・松尾治郎②・石村マツノ
- 藤野幸子②・富重芳子②・星野玄
- 鶴田俊隆②・丸尾好幸②・荒巻重義
- 高木千寿丸②・富永紗智子②・森志げる
- 林千代子②・糸山好太郎②・山口由利子
- 木原光男②・吉田洋一②・神戸純子
- 渡辺美津子②・荒谷幸子②・山田博子
- (前原市) 由比章祐④・(大野城市) 伊藤泰輔⑤・田代直輝⑤・執行敏彦②

- 山田 栄・久野敦子・(春日市)
- 後藤和子④・白水都・(筑紫野市)
- 横溝清④・脇山浦一郎⑤・川浪由紀子④
- 原富子③・(太宰府市) 中村ひろえ⑤
- 佐々木謙⑤・古賀謙二④・平岡浩④
- (筑紫郡) 結城慎也⑤・粕屋つよ
- 西尾弘子③・末松祐而⑤・蔵田はつよ
- (筑紫郡) 結城慎也⑤・粕屋つよ
- 榎田正己⑤・榎田猶子⑤・神崎憲五郎④
- 青木良之助④・友野隆④・松本雄一郎④
- 酒井俊寿③・鈴木惠津子②・川原敏子②
- 長崎榮市②・井手伽維子②・(宗像市)
- 益尾大嶽④・(甘木市) 佐野至⑤
- 酒井カツヨ⑤・黒川邦彦⑤・井手太⑤
- 井上清⑤・宮崎倉夫④・田中トクエ③
- 富田英寿④・(朝倉郡) 鬼丸雪山④
- 山崎エツ子②・(飯塚市) 小山元治⑤
- (浮羽郡) 吉瀬宗雄⑤・(大牟田市) 嶽村魁⑤・古賀義朗②⑤・古賀邦靖
- 西山正昭・(筑後市) 中島栄三郎②
- (苜田町) 木下勤⑤・(北九州市)
- 片桐三郎④・平野巖④・(柳川市)
- (久留米市) 庄野陽一⑤・(丸善一郎)
- 榊島政信・(直方市) 山本利行④
- 鋤田祥子・(佐賀県) 甲本達也④
- (大分県) 寺川泰郎⑤・田本政宏②
- (長崎県) 浦上健③・(熊本県) 濱北哲郎⑤・(山口県) 大塚博久④
- (大阪府) 小山富夫②④・前田敏也子③
- 松村浩二・(滋賀県) 辻本雅史②
- (愛知県) 杉浦五郎④・庄野健次④
- (神奈川県) 中野昂子②④・林田睦
- (東京県) 片桐淳二④・山根貞与②④
- 村山吉廣③・田中加代②・大島節子
- (千葉県) 森久⑤・(埼玉県) 間所ひさこ③④・(石川県) 丸橋秀雄③
- (宮城県) 田中信彦②⑤

### 【協賛会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)⑤・中村登(福岡)⑤
- 大里豊男(福岡)④・広瀬忠(福岡)④
- 笠井徳三(福岡)④・早船正夫(福岡)④
- 菅直登(福岡)④・野口一雄(福岡)④
- 荒木靖邦(福岡)④・梅田光治(福岡)④

- ・柿みかん栗耳遠き神のみけ
- ・青竹で編むおくんちの供物舟
- ・おくんちへ帰る渡船の乳母車
- ・神事とは男の世界鷹渡る
- ・穴惑ひ島の因習抜けられず
- ・廃線の陸に朽ちゆく帰燕以後
- ・虚栗絶えて久しき文士の居
- ・檀旧居ひそと蜥蜴は穴に入る
- ・糞虫の捨てし糞あり海難碑
- ・檀一雄旧居露けき椅子二つ
- ・杵散る鹿棲みし世の登窯
- ・十月の揚舟ゆるぶまで乾く
- ・登高や島に孔子の五寸像
- ・棚畑は海に傾き島渡る
- ・遠鴟や住まねば荒るる檀旧居
- ・三代の誉れをしかとくんち率く
- ・張る幕は海の蒼さの秋祭
- ・旅人に地酒ふるまふ浦まつり
- ・実紫妃より出づ宮由來
- ・浦祭り船つくだびに島膨れ
- ・昼酒に神も喜ぶ秋祭り
- ・廻船の漕がざる刻を鴨渡る
- ・秋の宮白紙くはへて神饌運ぶ
- ・つづれさせ能古おかさること三度
- ・盛りとはどこかが幽き曼珠沙華
- ・神饌捧ぐ度の一拍秋澄めり
- ・防人の島の百戸の秋祭

世紀夫 哲朗 重成 こうじ 光風 静子 美智子 鎮 佳子 橋本 照子 梢 洋子 静 君代 美知子 恵美子 多々志 松尾 照子 寿美子 安部 一二三 吉美 星 一二三 壽美子 ゆず子 慎二 輝子 蓬頭

- 浄満寺(福岡)④・永田 蘇水(福岡)④  
 奥村 宏直(福岡)③・安陪 光正(福岡)③  
 沖 双葉(福岡)④・七熊 澄子(福岡)④  
 熊谷 雅子(福岡)②・上田 渡(福岡)①  
 小田 准輔(福岡)②・富安 清(福岡)①  
 小田 一郎(福岡)①・滝 栄三郎(福岡)①  
 木原 敬吉(飯塚)④・具嶋 菊乃(甘木)③  
 大久保津智夫(嘉穂)④・庄野 直彦(直方)④  
 原田 國雄(宗像)⑤・森光英子(久留米)②  
 西喜代松(北九州市)③・永井 功(北九州)①  
 花田加代子(遠賀)③・本村 康雄(三池)①  
 中山 重夫(唐津)③・緒方 益男(佐賀)④  
 七熊太郎(佐世保)④・七熊 正(佐世保)③  
 浦上 健(長崎)①・小堀 定泰(滋賀)③  
 伊藤 茂(神戸)③・西村 俊隆(東京)④  
 白水 義晴(東京)④・早船 洋美(東京)④  
 石野智恵子(東京)④・多々羅幸男(千葉)③  
 江崎正直(千葉)①
- 【法人協賛会員および特別協力法人】  
 九州電力 株・大野 茂(福岡)  
 株 新出 光・出光 豊(福岡)  
 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)  
 株福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)  
 法人南川整形外科病院・南川勝三(福岡)  
 日本製粉株福岡工場・白尾嘉弘(福岡)  
 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)  
 流通 共済 株・花田積夫(福岡)  
 タイム社印刷 株・安部博満(福岡)  
 株 笠 組 笠 忠夫(福岡)  
 博多ちくわ・株魚嘉・松尾嘉助(福岡)  
 株藤藤理事務所・株藤成文(福岡)  
 株通配送 株・富安 渡(福岡)  
 大牟田運送 株・本村康雄(福岡)  
 株三島設計事務所・三島庄一(福岡)  
 日西物流 株・原 重則(福岡)  
 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)  
 東洋特殊機工 株・西尾敏明(福岡)  
 西尾トラック運送 株・西尾秀明(福岡)

# 能古博物館の会

南愛光ビルサービス・野田和禧(福岡)  
 南クリーン開発・野田和禧(福岡)  
 延 寿 産 業 南・池田邦夫(福岡)  
 九州三菱ふそう自販株・安崎慶一(福岡)  
 南 安 河 内 商 店・安河内紀男(福岡)  
 木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)  
 ※新規の御加入(先号以後、平成六年十月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしましたので、何卒御芳名を御確認下さい。  
 ありがとうございます。

友の会 年間3千円  
 (館)の活動、館誌購読と催事企画に参加  
 自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
 (法人)年間3万円  
 (館)維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける

納入方法 郵便振替 0173019160970  
 右の会費受領は、能古博物館  
 以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

## 『閨秀 亀井少栗伝』

詩、書、画の作品で仙屋の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌までもある。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。  
 B5版・表紙布装美本  
 限定 二、〇〇〇部  
 収録全カラー50頁・本文94頁  
 直売頒価 三、〇〇〇円  
 (送料 三二〇円)

## ◎本誌今号「寄稿感謝します」

●由比章祐先生の今宿亀井家記事には、幸いに主人公の雋永自筆「天遊」の二字書が、亀井家より協賛され良い紹介になりました。雋永は少栗仕込みの書上手です。

●安陪先生の「老子を聴く(三)」のご寄稿は、題材のご豊富とともに珍しいお写真が、程良くカラー頁に入り、お蔭様で紙面が映えました。

●墨 羊子さん 来年のペン画カレンダー出来ました。図柄は田舎の萱葺き屋根です。ドイツで重度麻痺を克服された哲学博士の甥ごさんに、今回も是非お送りしてください。

●ご寄稿は心あたたまる内容です。感激を表明し、お禮を兼ねます。菜穀火の皆様・吟行句ありがとうございます。今後もよろしくお願ひ申します。当館の萱葺き家のカレンダー2部ずつ、景品代わりに進呈します。



## 治之公ものがたり

こぼれ話

黒田家第七代藩主を継いだ治之は、本稿に書いた通り、第八代將軍吉宗の孫である。祖父は名將軍、ゆるみが出始めた徳川体制を立て直した。

治之は、こうした話もよく聞かされていたと思うが、別段に気負いも見せず、育ちの良さがうかがえる。

十三歳で養子話がきまり、黒田家江戸上屋敷に引き取られる形で移るのであるが、もともと大名の子というの生まれ落ちた時から赤の他人に見守られ育てられる。父母も家族もない生活である。

黒田家に移るのも、自分の部屋と使用人(女中と家来)が変わっただけである。但し一橋徳川家からの終身付添いの家来が二名つく。この兩人も黒田家の家臣になる。養子になって六年后、いよいよ養父継高が隠居。これで治之が筑前守となって、わが領国に初入国が決定すると將軍家治から遠く九州に旅立つ甥に、將軍乗馬を愛用の鞍置きのまま選別に貰う。すでに数々多くの引出物を頂戴しておるが「その方、馬が好きであったな。余の使い馬を餞別につかわす」の言葉が治之に何より嬉しく、將軍

は自分の馬好き、馬術免許のことを知ってのことと感激したと察せられる。

治之は、この馬を初入国行列に加え、家臣を選んで別に人数を揃え日数を置いて、自分の福岡着後に着くよう手配させた。

治之と家治將軍の個人的な相性は良く、治之が五回目の参勤で江戸着後、定例の登城と拜謁が終ると老中から、將軍が奥の御休息間に入られるまで城内にとどまり給え、と告げられたことがある。時刻が過ぎて茶坊主から「將軍さま、本日の表御用終られました。奥に移られ御休息なされます。お話相手にお越しあるよう…」と、案内により將軍の前に出る。もっと側によれ、と言われてなお小声で「自分の後は、一ツ橋と決めておるので、含みおくように…」という重大事のお打明けである。

家治に子がないので、早やくも後継將軍の動きがあるのは治之も知っていたが、今度の話して吉宗將軍以後、すでに直系で家重、家治つまり吉宗の子と孫の二代つづき吉宗直系である。そのため御三家から紀伊を除き次は尾張か水戸という状況に対し、家治は一ツ橋に決めているので心しておけということである。結果は天明七年一ツ橋治済(治之の末弟)

の長男が第十一代將軍家斉になる。これで治之が將軍の伯父となり、福岡藩主と將軍の血つづきが接近する。御三家はもとより御三卿といわれる一橋、田安、清水が波立つなどという家治の心づかいである。

黒田家は外様大藩(前田、島津、伊達、細川)に次ぐ五番目であるが、將軍を中心すると他藩にない直近大名家となる。

治之を本誌が記事にしたのは前号の『君侯病候論』であるが、筆者は、治之公は亀井南冥登用と南冥が藩学校建設請願をした藩主であり、従来の前例にこだわりのないものがある、として治之公研究を始めたことになる。

## ・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881